

市では、さまざまな施策や事業の背景や本質を丁寧に深掘りし、多様な価値観への気付きを提供するウェブメディア「Think都城」を運営しています。これまで発信した17テーマ、100以上の記事の中から、厳選した記事の特別編集版を不定期でお届けします。

※本記事の全文やこれまでに発信した記事など、詳しくはホームページを確認ください

◎問い合わせ デジタル統括課 ☎23-2156



—深く多面的に、考える—

Think都城

千葉ロッテ「都城キャンプ」の深層
「球場整備」だけじゃない魅力

2026年2月の祝日。この日は、千葉ロッテ1軍キャンプ前半最終日。キャンプ地となった「都城運動公園」はかつてない雰囲気包まれていた。

球場正面では、選手の「のぼり旗」が出迎え、先には「コアラのマーチスタジアム」の旗が続く。

スタジアム内野席からは練習に励む選手たちを見守ることができ、屋内競技場「パイの実ドーム」や投球練習場「クローリッシュブルペン」にも観覧エリアが設けられていた。



スタジアムの外には飲食ゾーンも。「都城メンチ」や「チキン南蛮カレー」などが並んだ。

直前の土日だけで約1万人もの来場者があったという。祝日のこの日は、最終日ということもあり約6千人を集めた千葉ロッテ1軍。熱気をそのままに、二次キャンプ地の沖縄県糸満市へと向かっていった。

千葉ロッテ1軍が都城でキャンプを張ったのは今回が初めてだ。

2025年春季、千葉ロッテ2軍が都城をキャンプ地を選んだことで話題となったが、2026年春季は1軍もそれまでキャンプ地としていた沖縄県・石垣島から都城へと場所を移し、都城は千葉ロッテ1軍の一次キャンプ地、および2軍の二次キャンプ地となった。

読売ジャイアンツ（巨人）がキャンプを行っていた時代から半世紀。装いを新たにした都城運動公園は、久方ぶりにプロ野球を呼び込み、都城の空気を変えた。

2軍中心だった2025年春季、観客の来場者数は延べ1万9千人ほど。それが2026年春季は1軍効果で2.5倍に増え、概算で延べ約4万9千人を記録している。

賑わいは、球場の外にも及んだ。中心市街地にある老舗のおでん屋

小島和哉投手も、「朝から晩まで野球を」とことんやるのに、とてもいい環境」と話す。

監督や選手が絶賛するキャンプ地・都城。都城運動公園は近年の改修や増設で、大幅にグレードアップしている。



都城市は老朽化した野球場にフルカラーLEDのスコアボードなどを導入。さらに2022年から、屋内競技場、ブルペン、サブグラウンドの3施設も整備した。これらは、非常時の防災拠点としての機能も備える。

まだ真新しい3施設。市は1軍キャンプを機に、防球フェンスのかさ上げやバッティング練習用ゲージの設置、空調整備など、さらなる受け入れ強化も行った。

施設の「組み合わせ」の評価もまた高い。都城は、サブロー監督が掲げた高い強度の練習を重ねる「昭和のキャンプ」と噛み合っていた。

「監督がキャンプ地に求めるポイントは何？」という質問に、サブロー監督は「そうですね、まずはやっぱり、効率がいい練習をしたいの

で、コンパクトであるべきだと思うんです。そういう面で、ここはすぐに移動ができる。本当に時間のロスが少ない」と答えた。

都城運動公園では、野球場を取り囲むように屋内練習場、ブルペン、サブグラウンドが集まっており、移動効率が良い。

以前のキャンプ地・石垣島では施設間の移動に徒歩10分以上かかることもあったが、都城ではそれが「数分」で済む。

一度、温まった体を冷やすことなく、次なる練習へ移れる環境。さらに、宿泊先ホテルから球場まで車で5分ほどという近さも、練習効率の高さにつながっていた。石垣島の場合、ホテルから練習拠点まで20分以上かかることもあったという。

球団や選手が魅力に感じているのは、こうしたハード・インフラ面だけではない。

「食事もみんなおいしい、おいしいって言って食べています」。サブロー監督がこう言うように、都城キャンプの魅力は「食事」を抜きに語れ



「雨風」店主の野村英樹氏は、「全然違います、1軍は。まちの人出やお客さんの数も、初日から違います」と話す。キャンプ期間中は、まちなかのホテルの一部で宿泊価格が普段の2倍以上に高騰。満室の日もあった。



サブロー監督、設備と食事を絶賛

「今年はわりと天気も良くて、新たに練習設備も増設してくださって、選手の仕上がりが非常に効率よく練習ができます。ここ都城で土台を作って、いい調整をして、開幕に合わせる。すごく順調なキャンプが過ごせたと思います」

都城キャンプの最終日、千葉ロッテのサブロー監督は、満足げな表情を浮かべ、こう話した。そして、キャンプ地としての都城の評価についても、こう言った。「ここは、すごくやりやすい。多分ね、環境面で言うと、もう僕がやってきたなかでナンバーワンって感じですよ」。

ない。前出の小島投手もこう話す。

「まず、ホテルの食事がとてもおいしくて、外食にはほとんど出ていないです。多分、ほかの選手に聞いても、みんなそう言うと思います」

大好評の食事の調理や準備は、一貫して宿泊していたホテルが担当。ホテルでの朝食と夕食、練習場所でのケータリングとともに、ビュッフェ形式で温かい食事が並んだ。

都城が持つ素材の質と調理の力。そこに「おもてなし」が加わり、食事の質を引き上げていた。

キャンプ期間中は連日、市や観光協会、地元企業などから差し入れが届き、都城産の「宮崎牛」はじめ、豚肉や鶏肉、野菜、フルーツなどの地元食材がふんだんに並んだ。小島選手も「すごく温かく迎えていた。食べていると感じています」と話す。

食の差し入れは、都城流おもてなしの象徴。選手の物心両面の満足度を上げていた。

雰囲気づくりに奔走 「スポーツ部」

おもてなしの対象は、球団や選手に限らない。

都城市は、施設の整備や食事面でのサポートに加え、雰囲気づくりで



も精を出した。象徴が、キャンプ会場に多数並んだ、のぼり旗である。球団や選手だけでなく、訪れたファンにも歓迎ムードを伝えた。

こうした受け入れ準備を中心となつて進めたのが、都城市役所の「スポーツ部」だった。

2025年4月、市は3つの機能を持った「観光スポーツPR部」から独立させるかたちでスポーツ部を新設。単独の部としてスポーツ関連業務に集中できる体制となった。

このスポーツ部が、限られた時間で受け入れ体制を整えた。

「コアラのマーチスタジアム」と決まったのは2026年1月。発表されたのは2026年1月末。翌月の春季キャンプまで時間がない中、大急ぎで市内事業者の力も借り、旗や印刷物などを準備した。一方で、球場を訪れるファンへの対応についても、余念がなかった。

「ほかのソフトバンクさん、巨人さん、オリックスさんとかのキャンプ地のイメージをここ、都城にも作りたくって。秋季の時は3〜4店舗だった飲食ゾーンを、10とか11くらいに大幅に拡大しました」

スポーツ部の初代部長となった原口文代部長がこう言うように、2026年春季キャンプからは飲食を大きく拡充。ファン向けの駐車場についても、改善があった。

球場に隣接した駐車場は、拡大することができない。そこで、サテライトの駐車場を約1500台分確保し、誘導した。一部のサテライト駐車場からはシャトル輸送も行った。

こうした飲食やアクセスの設計もまた、キャンプ地を訪れるファンにとっては「体験」の一部。対応は当然、千葉ロッテへの愛着につながる。

出来る限りのおもてなしを尽くした都市と新生・スポーツ部。受け入れが、部署ではなく「体制」で動

いていたからこそ、球団や選手の満足度も高まったのだろう。千葉ロッテからも「お返し」とばかりに、地元小学生へのプレゼントがあった。

千葉ロッテは春季キャンプを前に1月中旬から2月にかけて、市内小学校の全校児童向けに千葉ロッテのキャンプ約1万個を配布した。

都市出身の森遼大朗選手は、自身が卒業した五十市小学校や球場に近い大王小学校に出向き、直接、小学生にキャンプを手渡すなどのサービスも行った。

千葉ロッテと地域との交流も深まっている。



すべてが関連する「政策」

都城に活気をもたらした千葉ロッテ。2軍のキャンプインからわずか1年で1軍のキャンプが実現した背景には、ハード面とソフト面を充実

させる複合的な要因、そして、おもてなしの努力があった。

選手の宿泊施設がある中心市街地の整備に市が乗り出していなければ、食事や宿泊での高い評価は得られなかっただろう。都城志布志道路の全線開通がなければ、ファンもこんなに集まらなかったかもしれない。

個別の施策が連動し、一つの流れをつくっている。千葉ロッテ1軍のキャンプインは、決して、施設だけで成立するものではない。

今後も千葉ロッテの都城キャンプの継続が保証されているわけではないが、いくつもの光明が見える。

今回のネーミングライツ契約は、2027年3月までの時限的なもの。しかし、一般にネーミングライツは同じブランドが複数年にわたって契約を続けることが多い。千葉ロッテのグループ会社であるロッテ本社が契約したのは、「今後も都城にキャンプを張り続けたい」という意思の現れかもしれない。

市も2027年以降、ネーミングライツの複数年契約を検討している。ただし、安穩としているわけではない。原口部長はこう気を引き締める。

「2軍キャンプ、秋季キャンプと

INTERVIEW

池田市長に聞く

なぜ千葉ロッテは都城を選んだのか

千葉ロッテ1軍キャンプが実現した背景には、どのような経緯があったのでしょうか。

池田市長 長い話からいくと、私が就任した当時の都城は、県内のほかの自治体と比べて、プロ野球のキャンプを呼べるような環境ではありませんでした。正直、プロに声をかけられる状況ではなかったと思います。

ですから、いきなりプロ野球というよりは、アマチュアの合宿誘致から取り組んできました。

都城運動公園の野球場に関して、グラウンドもスコアボードも正直ひどかったので、徐々に予算を計上して段階的に整備しました。

ただ、将来的にプロ野球でも使ってもらいたいとなると、野球場だけでは足りない。屋内競技場やブルペン、サブグラウンドといった施設も必要になります。

都城運動公園は防災拠点でもありますので、そうした位置付けも含めて国の交付金を活用しながら整備を進めました。

施設を整備すれば、球団が来るというわけではないですよね。

池田市長 そうですね。球団が「何年後に来ます」と言っていて、それに向けて行政が整備する、ということは現実にはあり得ない。

なので、市民のためのいざという時の防災拠点として施設環境を作りつつ、プロ野球に対して、「こういう形で整備を進めています。ぜひご検討ください」という話をしていました。千葉ロッテさんに関しては、2022年に球団幹部が宮崎に来られた時にお会いして、本当に簡単な紙1枚だけで、ご説明をさせていただきました。

こちらが動かない限りは、絶対に箸にも棒にもかからないと思っているので、まずはこちらが先行する。

屋内・ブルペン・サブの3施設は当然市民にも使ってもらえますし、防災上のバックアップでもあるので、それもあって、お願いに行けたというところもあります。

3施設の設計段階でも球団の意見を取り入れたと。

池田市長 はい。プロが使うとなると、やっぱり使い勝手が良いほうがいいですし、例えば「仕切ネット」にしても細かい仕様があるようです。プロを意識して3施設を設計したことも、結果につながった要因なのではないかと思えます。

2025年春季に2軍キャンプが実現しました。その時点で、1軍の話も出ていたのでしょうか？

池田市長 ゼロです。2軍キャンプが決まったら、すぐにやりなさい。素早く対応することが球団からの信頼を得て、もしかしたら1軍キャンプへつながるかもしれない」とは言っていました。まずは2軍のキャンプで実績を積んでいこうと。でも、さすがに2軍の1年後に1軍も来てくれるとは、想像すらしていません。

なぜ、千葉ロッテはこのスピード感で1軍キャンプまで決めたとお考えでしょうか。

池田市長 施設を気に入っていただけということもありますが、やっぱり2軍への対応を見ていてくれて

経験して、お客様の受け入れなどで、これじゃちょっとダメだよっていうところを自分たちなりに改善して来ました。でも、まだまだっていうところはあります。グルメの部分も、都城の食をもっと前面に打ち出して、強みを生かせるようなしつらえにしていきたいと思っています」

観客動員についても、満足はしていない。

「もっと多くのお客さんに来ていただきたい。地元のファンも、もっと増やしていきたいといけない。地元の民間が設立した千葉ロッテマリーンズ都城応援団っていうのができて、110社くらいの加盟がありますので、そういう方々にももっと足を運んでいただいで、応援していただくように、工夫していきたいです」

プロ野球と地域活性の好循環は始まったばかり。新たな「資源」として静かに、しかし力強く動き始めている。



いたことが大きいのではないのでしょうか。

職員も本当に一生懸命やってくれたと思いますし、ホテルや食事のスタッフを含め、関わっていただいた全員ががんばってくれて、そのことが、選手や球団関係者の方々に良かったと思ってくれた。球団の内部事情は我々に分かりませんが、そうじゃなければ、こんなことは普通、ないはずですよ。

アマチュアのスポーツ団体をターゲットとしてプロ野球1軍までできました。

池田市長 そうですね。もうやっとなら、やっとならできました。ただ、私のなかでは、なんとか県内の他の自治体に追いついたかな、みたいな感覚です。ようやくプロが来てくれるようになったからこそ、アマチュアへの波及効果にも期待しています。

